

2024年(R6)7月10日

発行所 石井記念友愛園
〒884-0102
宮崎県児湯郡木城町大字椎木644番地1
☎0983-32-2025 E-mail yuuaisya@kijo.jp

プラスのエネルギーに転換する

園長 児嶋 草次郎

暑中お見舞い申し上げます。

梅雨の雨の下で元気に咲くアジサイを楽しんでいたら、突然に、ガラガラの猛暑の夏がやって来ました。7月に入って、35℃を越えるような暑さが続いています。皆様、くれぐれもお体を大切にしてください。

さて、高鍋の「友愛の森」事業も、ようやく複合・共生施設として動き始めています。6月1日より石井記念明倫保育園が旧園舎より新しい建物に移転し、新設の小規模児童養護「あきづきの家」も、7月1日に建物の3階部分でオープンしました。また、明治期の建物を改修し、障がい者の働く場として再生した「せいごろう亭」も、7月1日より一応スタートしました。こちらはまだ整備等不十分ではありますが、走りながら徐々に整備していきたいと思えます。カフェも開設しましたので、皆様ぜひお友達と一緒にお茶のみに行ってくださいとありがたいです。

この「友愛の森」事業を開設するにあたって、多くの関係機関、支援者の皆様に御指導・御支援をいただきました。ここにあらためて感謝申し上げます。その中で、特に以下の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

①元谷ロレディースクリニック（閉院）、谷口二郎御夫妻様。この計画がちょうど谷ロレディースクリニックの閉院と重なり、多くの家具・電化製品・設備等を無償で譲ってくださいました。二郎様が日頃親しんでおられたというグランドピアノは一階ホールに設置し、奥様が高校時代に描かれたというセザンヌ風の絵は、3階の子供たちの図書室に飾らせていただきました。これから、子供たちの感性の教育に長いこと貢献くださることでしょう。私は奥様の油絵が気に入っています。

②道北善枝様。御尊父の道北昭介氏は、高鍋が生んだ画家です。生まれは「せいごろう亭」と同じ六日町、昭和5年です。学校の先生をしながら絵を描いておられましたが、36歳で家業の旅館を継ぎ、平成5年63歳で他界。

私はこの画家の遺作展（平成8年）を見て憑かれてしまいました。その時にははっきり言葉で表現できなかったけど、今は書けます。「この人は高鍋町のドロドロとした歴史を昇華させるために戦った土俗の画家だ！」この画家の美術館を作ることが私のひそかな夢となり、今回、娘さんの善枝さんの御理解もあり、その作品の一部を「せいごろう亭」の2階に展示することができました。血の染みこんだ大地が、蛾のサナギの体内のように混沌となり、やがて結晶化して美しい町へと変身していく。その世界は時を越えた戦いであり、道北氏のそのエネルギーが先人たちへの供養になっている。私はそのように感じるのです。善枝様、ありがとうございます。

③宮本工様。高鍋町の中央公民館の南側に建っている石井十次の銅像は、岡山の彫刻家宮本隆氏の制作です。高鍋町立図書館の前に建つ柿原政一郎胸像も同じく宮本隆氏の作です。宮本氏は、父嶋一郎の友人でした。いずれも、父を介して制作依頼がされたものと思われれます。昨年、この旧宮本隆氏宅を訪問した時、私は、「友子像」に出会いました。長男の工氏が現在それらの作品群は管理されているのですが、

この「友子像」を「友愛の森」の玄関ホールに展示したいので、寄贈してほしいとずうずうしくお願いし、心よく譲ってくださったのです。工氏の長女、つまりお孫さんの像なのです。隆氏の愛情があふれんばかりにこもっていて、プラスのエネルギーを発しています。私は石井十次資料館のルノアールのココの像（次男）と変わらないくらいの傑作であると思っています。多くの親子にプラスの力を与えてくれることでしょう。

④師村妙石様。中国での個展 30 回以上で、長年中国との友好と文化交流に貢献して来られた書家の師村妙石様より、「友愛の森」の表の看板を書いていただきました。「隸書体（れいしょたい）」という書体で、じっと見つめていると、反骨の文化みみたいな雰囲気を感じます。これから中国と多くの時間を共用してきたこの文字とともに高鍋の歴史を刻んでいくと思うと、勇気が湧いて来ます。無償で書いていただいた師村先生には、心から感謝です。

マイナスのエネルギーをプラスに転換させるためには、やはり多くの人々のプラスのエネルギーを集める以外ないだろうと思います。他にも色んな方々の御支援をいただきましたが、今回は紙面の都合で省略させていただきます。

以下は7月7日の児嶋虜一郎・登美記念式での理事長としての挨拶です。

本日は、児嶋虜一郎・登美記念式に御出席くださいます、ありがとうございます。

今年は、石井十次没後 110 年、児嶋虜一郎生誕 110 年という大切な節目を迎えております。その記念事業として、昨年度から、都城市では、母子生活支援施設「みどりホーム」の建設と、高鍋町では、複合・共生施設「友愛の森」の建設・改修を進めてまいりましたが、「みどりホーム」は5月に開所し、「友愛の森」の石井記念明倫保育園は6月1日より移転し、小規模児童養護施設「あきづきの家」と茶臼原自然芸術館「せいごろう亭」は、7月1日よりオープンしました。

関係機関を始め、多くの支援者の皆様の御指導と御支援のおかげであると、あらためて感謝しております。普通は建物が建って事業が始まったらそれで一軒落着なのですが、石井記念友愛社の施設は、そうであってはならないと思っています。つまり、その建物にプラスの魂を入れることが必要なのです。プラスの魂とは一体何なのか。一人一人の職員たちの思いをこめる作業であると思います。観光地などで、パワースポットと呼ばれる場所があります。神聖な気持ちになれて、心が癒される気持になる場所をそう呼んだりしています。この石井十次墓地はまさにそういう場所です。パワースポットです。石井十次が亡くなって 110 年間、この地に繰返し多くの人々が集まり、感謝や祈りをささげて来た場所であります。

石井十次は、この茶臼原大地に理想郷を建設することを夢見て来ましたが、多くの災難もありましたが、石井十次を初め、多くの子供たち、職員たちが夢を描きプラスのエネルギーを注いで来た場所なのです。私たちは、それら先人たちのエネルギーに守られて、今この地で前向きに生きていくことができいております。

しかし、一方パワースポットとは全く逆の雰囲気を醸し出している土地もあります。そういう場所については、人々はあまり語ろうともしませんし、記録に残そうともしませんでした。しかし、感性の豊かな人は、その地に立つと、違和感を感じますし、なんだか、自分のエネルギーを吸い取られるような負のエネルギーを感じ取ってしまいます。

今日は子供たちも出席していますので例えて話しますと、グチや不満や恨み辛みばかり話しているような雰囲気の中にいると、気持ちがゾーとして来て、魂まで抜き取られそうな気がして逃げ出したいくなる、そんな雰囲気に似ていると思います。

かつて、この茶臼原、特に現在石井記念友愛社の事務所のあるあたりは、九州の関ヶ原の戦いと言われる豊臣と薩摩とが戦った場所であり、おそらく多くの若者たちが無念の死を迎えた場所であると思っています。石井十次はそこに多くの若者が夢を描くことのできる理想郷を建設することが、供養になり、また、マイナスのエネルギーをプラスに転換させることになると考えたに違いないと思っています。

話を高鍋の「友愛の森」にもどします。お導きにより高鍋の歴史的にも文化的にも中心地で活動することになり、建設が始まった頃、周辺を歩いていて、なんだか暗くて重いものを感じました。言わばマイナスのエネルギーです。高鍋という町は、狭い土地ですが、1000年以上の歴史を有し、その支配者も、土持、伊東、島津、秋月と変わって来ています。支配者が変わるということは、その前後に、大小の命をかけた戦いがあり、その度に恨みや辛みが血とともに大地に染みこんでいるのではないかと。歴史とは常に支配者の歴史であり、敗者の歴史はそのつど抹殺されていきます。

本来、宗教者がその供養やエネルギーの転換はやるものなのでしょう。けれども、時の流れの中で、忘れられて来たのではないかと思われます。だとするならば、ここで事業をしようとする私たちがその歴史をキチンと受け止めて、私たちのできる慰霊あるには供養をして、人々の感謝の気持を集めて、マイナスのエネルギーをプラスに転換していかねばならないと感じました。そのためのしかけも何点か用意しました。

この茶臼原と同じように、近い将来、この「友愛の森」がパワースポットとなり、訪れる人々の魂を癒し、その言動を未来志向へと導いてほしいと願っています。

話を石井十次没後 110 年、児嶋城一郎生誕 110 年にもどします。来年が戦後 80 年ですので、石井記念友愛社創立 80 周年ともなります。

この節目を、私たちはどのような気持ちで乗り越えていったらよいのか。先日、友愛園の中・高生の子供たちには話しましたが、今日は保育園関係の職員たちも多く来ていますので、その話を紹介します。

私たち人類（ホモ・サピエンス）がこの地球上に出現したのは、今から 20 万年か 30 万年前、アフリカの大地の上だったそうです。それが、6 万年前にアフリカを脱出し始めています。なぜなのか。友愛園の「明倫塾」の時、ある子に質問したら、「夢を持ったから」と言いました。すばらしい答えだと思いました。人類には、ネアンデルタール人とか北京原人などもいたと私たちが中学生の頃には習いました。しかし、その旧人と呼ばれる人々は絶滅したのだそうです。絶滅と繁栄とを分けるものはなんだったのか。私はその「夢」だと思うのです。

もし人類がアフリカを脱出していなかったら、我々の祖先も絶滅していたかもしれません。もちろんここにいる私たちもこの地上に存在しません。

脱出することは生易しいことではありません。あの山脈を越えて行ったら、理想の大地が広がっているかもしれないとは想像しても、逆に敵がいて、いきよに殺される可能性だってあるのです。丸木舟で海にこぎ出したら、理想の小島があるかもしれないけれど、途中で嵐に合ってこっぴみじんに波に碎かれる可能性もあるのです。夢に向かって行動することは、常にリスクを背負っての冒険でもあるのです。

夢を描いてアフリカを脱出した民族は、やがてアジアを通過して日本列島に渡り縄文人となり、またアメリカ大陸へと渡っていき、インディアンとなりました。

石井十次先生は、なぜ安定した岡山を捨ててこの茶臼原へと大移住を決行したのか。やはり夢を描いたからです。子供たちの成長にとって大自然が必要であり、この大自然と共生することで、子供たちの感性が養われ自立に役立つと確信したからです。

しかしマイナス思考の足引っ張りはいつの時代にもいるものです。

「途中で事故にあつて子供たちが命を失うようなことになったら、だれが責任をとるのですか。」

「宮崎へ移住してうまくいかなかったら、また岡山に帰って来るつもりなのですか。」

そんな言葉で批判されたら、だれでも足がすくんでしまうでしょう。そこで夢をあきらめていたら、現在の石井記念友愛社はありませんでした。

私たちは、その夢の戦士の末裔であるということ、常に自覚して仕事をしなければなりません。つまり、常に未来志向の夢人間でなければならないのであります。人類は常にリスクを背負いながらも、未来へ足を踏み出す人間でいなかったら、絶滅するのであります。

この話を子供たちのそれぞれの人生に置き変えたらどういうことになるのか。昨日の「明倫塾」で話しました。

好き好んで友愛園（児童養護施設）に来る子は一人もいないでしょう。家族と一緒に生活できるのが一番幸せに決まっています。しかし、家族から離れなければならない事情があつたのです。その時点で人間はだれもが恨み辛みを持ちます。だから、この施設は恨み辛みの集団と言ってもよいでしょう。その恨み辛みの集団に流されてしまったら、常にグチや不満しか持たない人間になってしまいます。

そこで、このマイナスのエネルギーをプラスのエネルギーに転換することが必要となります。先人たちは色んな知恵を働かせましたが、友愛園にも色んなしかけがあります。論語の「遠き慮り無ければ、必ず近き憂い有り」に出会うことも、しかけの一つです。将来への夢や志があれば、身の回りで起こる小さなトラブルに巻き込まれることはないです。中・高生たちは6月には、それぞれに「将来への夢」作文を書き、梅雨期のイライラや誘惑を乗り越えようとしてしました。子供たちには自分の運命を変えるための修行の場が友愛園の生活なのだを繰り返して話すようにしています。

しかし将来の夢や志とは言っても、親が支えてくれることはあまり期待できないし、何一つ保証されるものはないのです。

「面倒くさい。オレはその日暮しでよい。」

「夜遅くまでゲームもしたいし、友達と町で遊びたい。」

そう言ってしまうとそれまでです。与えられたチャンスや出会いは逃げていき、“貧困の連鎖”を繰り返すしかありません。ここを出た時、戦っていく術を何も持たないことになってしまいます。

将来への夢や志を絶対実現するぞ、という強い思いで生活し、社会に乗り出し戦っていける生活習慣力、忍耐力、自律力、感謝の心等をここで身につけていくのです。そのスタンスは6万年前のアフリカの人類とほとんど変わらないと思います。彼らもそれなりの覚悟で乗り出したはずです。

それぞれの立ち位置を確認し合う、大切な時に私たちは今いることを自覚し合いたいと思います。本日はありがとうございました。